

なぜ日本にキリスト教哲学が必要なのか(組織神学センター連続講座)

著者	豊川 慎
雑誌名	聖学院大学総合研究所newsletter
巻	Vol.19
号	No.1
ページ	30-31
発行年	2009-07
URL	http://id.nii.ac.jp/1477/00002406/

【組織神学センター連続講座】
なぜ日本にキリスト教哲学が必要なのか

2009年3月17日（火）、聖学院生涯学習センターにおいて第10回組織神学研究センター連続講座が開催された。茂牧人先生（青山学院大学総合文化政策学部教授）が「なぜ日本にキリスト教哲学が必要なのか」と題して講義を行った。今回は「なぜ日本に神学が必要なのか」という主題のもとに毎月開催されてきた連続講座の最終回にあたり、26名の参加者があった。以下、講義の概要を記す。

茂氏によれば、ニーチェが形而上学的な「真理」を解体する作業を哲学的に遂行して以来、ニーチェの哲学の影響を大きく受けた日本の哲学潮流においても真理自体を語ることはたいへん難しい状況にあり続けている。そのような中であって、イエス・キリストこそが「真理」であると主張するキリスト教はいかなる仕方でそれを語るができるのか。茂氏は「ポスト形而上学の時代において、ニーチェ以降のキリスト教は、それ自身語り方を変えていかなければならないのである」と述べる。そしてそれはポスト形而上学の時代における「キリスト教哲学」の構築によって試みられ、「信仰と理性との間に共通の地盤を作り出すことを目的」とする「弁証学としてのキリスト教哲学」は「ある種の真理の可能性について論証し、弁証していく」という課題を担う。

茂氏は20世紀を代表する哲学者の一人であるハイデガーの思想や、パスカル、またヘーゲル哲学を手掛かりに論じつつ、「キリスト教哲学」のあり方、特徴、そして今後の課題などを講じた。茂氏によれば、キリスト教哲学は近代的な主観－客観の図式の根底にある理性を超えたある種神秘的な側面を持つ。氏は言う。「神秘への信仰の生

の事実性の論理は、形而上学に支えられた単なる哲学的な洞察を拒むのであり、逆にこの神秘への信仰の生というものに支えられて初めて愛の論理による思索が可能となるのである」。これにより、単なる形而上学ではない信仰の生の愛と精神の論理こそが現代における「真理性」の語り方となり得るのである。

講義後には活発な質疑応答がなされ、2008年度組織神学連続講座（全10回）は盛会の中に最終回を終えた。

（文責：豊川慎 聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科博士後期課程）

（2009年3月17日、聖学院生涯学習センター）